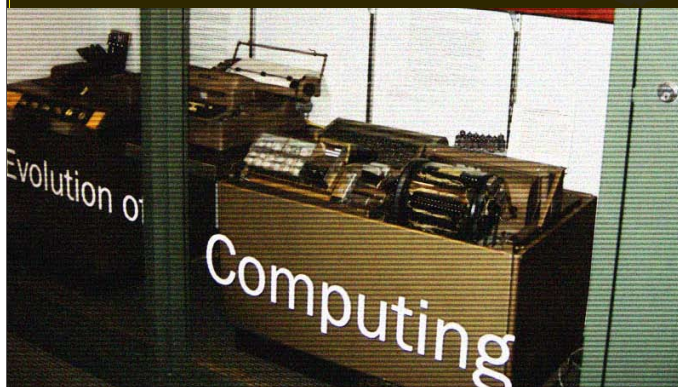


DH-JAC2009

● 特集 ● **INTERVIEW** インタビュー
「コーディネーターに企画趣旨を訊く」

● 日程: **2009. 2.27 fri & 28 sat**
● 会場: 立命館大学衣笠キャンパス・以学館2号ホール

第1回日本文化デジタル・ヒューマニティーズ国際シンポジウム
The 1st International Symposium on Digital Humanities for Japanese Arts and Cultures (DH-JAC2009)



Contents

特集 DH-JAC2009 INTERVIEW インタビュー コーディネーターに企画趣旨を訊く	2-4
八村 広三郎 CH から DH へ	5
前田 亮 イギリスにおける デジタル・ヒューマニティーズの研究動向	6
イベント情報・行事の記録	7-8

Interview
01「イメージDBと博物館ネットワークのイノベーション」
コーディネーター、赤間 亮教授に訊く

赤間 亮（立命館大学大学院文学研究科・教授 / 「日本文化研究班」）

—今回のシンポジウムには、「イメージDBと博物館ネットワークのイノベーション」というタイトルが付けられています。まず、イメージデータベース（以下、イメージDB）のイノベーションから、企画意図をお話いただけますか。

赤間：実は、技術的なレベルでは、イメージDBを作るということ自体は、決してイノベーショナルなことではありません。

しかし、その技術が現場での使用に耐えるまでに十分に練られ、実際に波及するまでにはそれなりの時間がかかります。特に人文科学という分野では、それが顕著です。とは言っても、イメージDBの存在は、人文科学研究においても、研究のツールとしてようやく認知された、という状況になりつつあります。

人文系の研究現場では、あるイメージについて語る場合、主に言語によって伝達してきたわけですが、イメージDBのような共通のプラットフォームが認知されることによって、デジタル・イメージを直接使ったコミュニケーションが可能になりました。このことは、すでに自明の前提になり、意識されていないとも言えるのかもしれませんが、今回のシンポジウムでは、改めて、イメージDBの存在が日本文化研究のイノベーションにつながると主張したいと思います。

—では、博物館ネットワークのイノベーションについては、いかがですか。

赤間：ご存知のように欧米各国には日本に関するさまざまな作品・資料が存在します。が、一部の大規模な美術館・博物館を除き、中小の美術館や個人コレクターのもとに収蔵されたものの大部分は、現在のところ、ごく限られた人の目に触れられるのみで、公開、あるいは情報の共有という点からは大きく立ち後れています。

これにはさまざまなレベルの理由が考えられますが、日本、あるいは日本の芸術や文化を研究する者は、そういった状況に対して、何ができるのか、どうしたらそれら多くの日本に関する作品・資料を深い眠りから覚ますことができるのかをもっと真剣に考えなくてはならない。実際、やるべきこと、やれることがたくさんあるのです。

その一つに美術館・博物館をネットワークでつなぎ、さまざまな情報の共有化を行うことが挙げられます。私たちの活動は、デジタルをキーワードにしています。実際にデジタル技術を用いて、博物館ネットワークをより

緊密に連携させていく手法を持っています。そういったものを提案しつつ、その可能性、あるいは問題点を検証したいと思っています。

—今回、キーノート・スピーチをされるヨーゼフ・クライナー教授は、ヨーロッパにおける博物館ネットワークのキーパーソンですね。

赤間：そうです。現在、法政大学におられるクライナー教授は、ENJAC という、ヨーロッパにおける日本美術部門を持っている博物館のネットワークを組織しました。また、ブラハ・ナショナル・ギャラリーのヘレナ・ホンクポヴァさんは、データベースをキーワードとして第2回のENJACの国際会議のチェアパーソンを務めました。お二人には、ENJACという博物館ネットワークを組織した、その趣旨を改めて伺いたいと思っています。また、このENJACですが、残念ながら、現状ではその活動は停滞していると言わざるを得ません。その問題点についても、事態に直面されたお二人からぜひ伺いたい。そして、どうしたらそれらの諸問題を解決できるのか、その糸口をこのシンポジウムで見つけたいと切望しています。

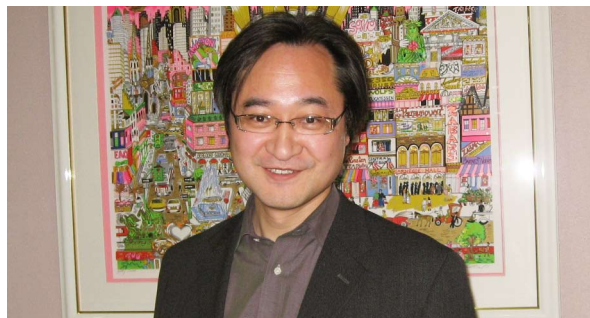
—ボストン美術館や大英博物館といった大規模な美術館・博物館からも講師をお招きしていますが。

赤間：言うまでもなく、両館とも、世界を代表する大規模美術館・博物館です。現在、世界の大規模美術館・博物館では、イメージDBを使った全収蔵品公開プロジェクトを積極的に展開しています。こういった公開が外部資金を集めやすいというトレンドもありますし、また、技術や組織といった諸条件が整ったという状況も大きく寄与しています。



今回、ボストン美術館からは、セラ・トンプソンさんとエイブラハム・シュレーダーさんのお二人をお招きしました。お二人には、デジタル公開の成功例として、ボストン美術館の日本美術部門の事例について報告していただきます。といっても、表層

的なサクセス・ストーリーを語っていただくのではなく、現場レベルでクリアしていかなければならなかったさまざまな問題について、できるだけ生々しく語っていただく予定です。一方の大英博物館では、現在、本拠点との共同作業によるデジタル公開がまさに進行中です。本拠点の若手研究者がアーカイブ・チームの一員として、作品・資料の考証をはじめ、撮影やデータの整理といった収蔵



品のアーカイブ化に必須の作業を大英博物館に赴き、その中で行っています。大英博物館のロジーナ・バックランドさんには、この共同作業の実例について、大英博物館側からお話ししていただきたいと考えています。

実のところ、今回のシンポジウムの参加者は、日本の美術・芸術に関わる作品や資料を扱うという共通のテーマがあるとは言え、お招きした講師の方々をはじめ、それぞれの立ち位置が微妙に異なります。しかし、シンポジウムという同じ場に居合わせることによって、それぞれの立ち位置の違いを超えて、これまでなかったようなアイデアが出てくるに違いないと思いますし、それがより大きなネットワークへと展開していくこともまた期待できる、と考えています。

(あかま・りょう 日本文化史)

(2008年12月10日、立命館大学アート・リサーチセンターにて)

Interview
02

「デジタル・ヒューマニティーズとは何か? —現在と未来—」
コーディネーター、矢野 桂司教授に訊く

矢野 桂司 (立命館大学大学院文学研究科・教授 / 「歴史地理情報研究班」)

—まず、今回の第1回日本文化デジタル・ヒューマニティーズ国際シンポジウムの開催趣旨についてお訊きたいと思います。

矢野: 私たちの拠点は、2007年6月に採択が決まるとともに、前身である21世紀COEプログラム「京都アート・エンタテインメント創成研究」の成果を踏まえ、教育・研究拠点としての活動を開始しました。今回の国際シンポジウムは、国内外からゲストをお迎えした上で、この2年間の私たちの活動を振り返ってみるとともに、今後の活動の道筋を改めて考えてみるのが私たちの大きなテーマになります。

が、もちろん、それだけではありません。もう少し大きな文脈で言いますと、昨今、人文科学という研究領域の危機がしきりに言われています。人文科学の範疇に含まれる諸学の研究が「蛸壺」化し、研究が停滞、閉塞したという状況もありますし、実際、大学の教育システムの中においても人文科学系の学部はドラスチックな対応を迫られています。その中で、デジタルをキーワードにした私たちの方法がどれほど有効なものであるのか、このことをこの2年間の活動を通して、人文科学の危機、日本文化研究の閉塞を実感している方々とともに考えたいと思い、この国際シンポジウムの開催へと至りました。



—先生のコーディネートされた「デジタル・ヒューマニティーズとは何か?」では、どのようなところが注目点になりますか。

矢野: 現在、世界各国でデジタル・ヒューマニティーズ(以下、DH)を標榜する研究者、研究拠点、学会の活動が急速に活発化しています。そうした世界の人文科学研究の最先端の動向を、まさにその最先端で研究に取り組んでいる研究者ご本人の口から直にお聞きするところが今回のシンポジウムの特色になります。今回、お招きしたゲストの皆さんは、文系・理系の出自を問わず、人文科学と情報技術の連携・融合を切り口に、膨大なデータベース、Web2.0、GIS、ヴィジュアライゼーションなど、それぞれの視点、方法により研究を深化させるとともに、さまざまなプロジェクトを通して社会にその成果を還元されている方たちです。それら世界レベルのDHのキーパーソンたちのお話しを直接伺い、彼らがDHをどう考えているのか、とい



うことをまず理解したい。その上で、歴史都市京都において、浮世絵データベースやバーチャル京都をはじめとする日本文化を研究するためのコンテンツを多く蓄積している私たちが、DH という新しい学問領域に対し、どのような意味を持つことができるのか、どのような貢献ができるのか、ということをお招きしたゲストの方々、会場にお越しいただいた皆さんとともに考え、議論したい、と思っています。そして、おそらく、このことが日本文化研究の危機的な状況を解決に導く一つの道筋につながっていくのではないのでしょうか。

—DH を考える際に、一つのキーワードとしてネットワークということがあると思いますが、今回のシンポジウムではネットワークがどのように活かされましたか。

矢野：2008 年 6 月にフィンランドのオウルで開催された Digital Humanities 2008 というカンファレンスに本拠点の稲葉光行教授が参加しました（本誌 4 号参照）。このカンファレンスには、欧米を中心とした DH 分野の研究者が多く参加していたとのことですが、この会場で、稲葉教授が本拠点の活動の広報を行いました。この時に、私たちの活動について、欧米、さらに日本の研究者の皆さんに注目していただくことができ、これが今回のシンポジウムにつながったとも言えます。私たちは、リアル、ヴァーチャルを問わず研究者・研究拠点のネットワーク化が重要だと考えています。このニュースレター 5 号でも八村広三郎教授、前田亮准教授が報告しているように国内外の DH や日本文化の学会に参加したり、研究拠点を訪問したり、そして、私たちの研究成果を積極的に発表しています。これらの蓄積が、世界のネットワークとうまくつながったのが、今回のシンポジウムなのだ、と言えるかと思います。

—最後の質問になりますが、矢野先生ご自身は今後の日本文化 DH の展望をどうお考えですか。

矢野：私自身の研究分野である地理情報科学を例にとってみましょう。地理情報を扱うツールとして、GIS が普及する一紙地図からデジタル地図になることで、作業効率が圧倒的に高まりました。つまり、地図を使った従来の研究が、大量の情報が処理できるようになって、質的に変化しました。さらに GPS やレーザー測量などの新しいさまざまなデバイスが加わることで、従来の地図上に表現されてきた 2 次元空間が 3 次元へと立体的に表現できるようになった、さらに時間軸が加わり 4 次元といったレベルでの検討も具体的にできるようになりつつある。3 次元・4 次元といった従来はあくまでも観念レベルでしか考えることができなかった事象が、現在では観念ではなく、具体的な視覚化された事象として取り扱うことができるようになっていく。新しい技術や装置の開発によって、既存のどの学

問分野もやっていなかったような研究テーマが出現し、それが新しい学問分野として成立してきているわけです。

日本文化研究の革新は、デジタルをキーワードにした場合、二つの方向から考えることができます。日本文化研究を DH の研究動向の中に位置づけながら、従来の日本文化研究をデジタル化することによって扱う情報量を増やし、そのことで研究内容の質的な向上を図り、これまで以上の知見を得る方向と、従来の日本文化研究にとらわれない新しい日本文化研究を作っていく方向です。そして、その両方ができる新しいタイプの日本文化研究者を育成したい、というのが私たちの拠点の目標です。

（やの・けいじ 地理情報科学）



（2008年12月11日、立命館大学アート・リサーチセンターにて）

● 特集 ● INTERVIEW インタビュー

「コーディネーターに企画趣旨を訊く」

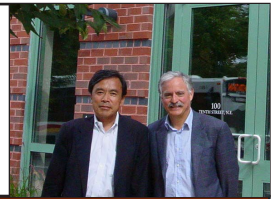
DH-JAC 2009

第1回日本文化デジタル・ヒューマニティーズ
国際シンポジウム

● 日程：2009. **2.27** fri & **28** sat

● 会場：立命館大学衣笠キャンパス・以学館2号ホール

● 入場無料（定員300名・先着順）



八村 広三郎 (立命館大学大学院理工学研究科・教授／「デジタルアーカイブ技術研究班」)

人文学と情報処理技術の連携は、日本では「人文科学とコンピュータ」、欧米では“Computers in the Humanities”、“Humanities Computing”などと呼ばれてきた(以下、CH)。ところが、21世紀に入って、欧米で「デジタル・ヒューマニティーズ(DH)」という言葉が、突然出現し、すでに学会や大学のコースなどの名称に一般的に使われるようになってきた。

名称を変えることは、一般に、対象となっているものを変革しようとする意志の現れである。この用語を使い始めた欧米の研究者たちはどう考えているのだろうか。今回、カナダ、アメリカのDH関係の複数の大学と機関を訪問する機会を得て、関係者からお話を伺うことができた。ここでは、彼らとの会話のなかで見えた、DHを性格づけられる事柄を簡単に紹介したい。

コンピュータのありかた

CHといえば、「人文学でのコンピュータ応用」ということだ。コンピュータは第一義的には「計算機」を示すが、今ではこの機械が「計算」のために使われている割合は少ない。すでに部品として社会に組み込まれてしまった「コンピュータ」を表にだすことはせず、その代わり、総体としての情報技術を指示する用語として「デジタル」を使う。さらに、これによって、従来のCHとは違う新たな方法で人文学を変えたいとの意思を示したのだ。

道具から情報

「道具」から、「情報」へと視点を移したとの見方もできる。Web上には実にさまざまな情報があふれ、われわれはこれらにシームレスにアクセスすることができるようになった。人文学においても、PCとWebという情報インフラによって、膨大な情報を手軽に扱う手段をわれわれは手にしたのである。もちろん、従来のCHでも当然のことながら情報中心の研究活動が重視されてきたが、グループや機関において閉じたものであった傾向が強い。今後はWebをベースとして、世界的な規模で、より積極的に情報を取り込もうということだ。

情報インフラ

今回、複数の人文系研究者から“Cyber Infrastructure for DH”の必要性ということをししばしば聞いた。この言葉からは、科学技術でのスーパーコンピュータと高速ネットの利用を連想する。もちろん、彼らも、これらを駆使しての大量のコーパス群を利用した人文学研究も視野に入れている。しかし、それだけでなく、Webベースで、世界中の多くの大学や研究所、また博物館・美術館や資料館などの所有する情報を結びつけ、横断的に検索や連結ができる巨大な知の集積を可能にするポータルを作る、ということも意図している。Webの利用環境はここ数年で質的変遷をとげ、初期の「見る」だけのWebからすでに「使う」ためのWebへと変わってきて

ている。人文学の研究活動のあり方をこの情報環境の変化に対応するように変えていこうという考えが読み取れる。

テキストからマルチメディア

初期のCHの研究は、コーパスなど、テキスト情報を対象とするものが中心であった。しかし、Web上でも画像・音声などのマルチメディア情報の取り扱いが容易になってくるに従い、研究の対象が拡大してきており、今では、人文研究者が手軽に使えるようになった。高速ネットワーク、画像処理、コンピュータグラフィックス(CG)、バーチャルリアリティ(VR)、XML、GIS、シミュレーションなどの技術の応用が期待されている。

科学的手法

DHでは、ソフトウェアやシステムの開発現場で利用されている、プロジェクト管理手法や情報管理の手法が重視されているのが確認できる。すなわち、これらの手法を取り入れることによって、今までの、作成者しか使わない(使えない)データ処理システムやメンテナンスの困難なデータベースではなく、長く広く使えるデータベースやシステムの開発を意図している。

DHの基盤

このように、DHの発想は、Webを中心とする情報共有・情報技術の普及と、科学的な手法の重視によって生まれたものであることが分かる。しかし、一方で、欧米におけるCHの伝統には、情報を公開し共有するための基盤となる、TEI(Text Encoding Initiative)の広がり、Library and Information Science(図書館情報学)の研究・教育の厚みなどがあり、さらにWebの利用による情報共有と国際的連携のマインドがすでに備わっていたという点を無視することができない。

DHへのシフト

リーダーとなるいくつかの大学でDHへのシフトは着実に進んでいるようだ。しかし、それ以外でもすべてうまくいっているとはいえない。「今後も引き続き、大学院生にデジタル技術の可能性を示すことが重要だ」というコメントが耳に残る。この意味で、本学でのGCOE活動にとっても、ビクトリア大学で毎年行われている、公開講座Digital Humanities Summer Instituteの活動が見逃せない。

国家の支援

アメリカ、カナダの政府がDHの進展と国際的連携に大きな努力をしているのも見逃せない。EUを中心とするヨーロッパやパシフィック地域との連携はすでに実を結んでおり、今後、東アジアへも輪を広げたいという意味が強く感じられた。

以上の点を踏まえ、本拠点でも、DHの思想的基礎を確立した上で、具体例を示すことによる若手教育の推進を検討しなければならない。

(はちむら・こうざぶろう 画像情報学)



2008年9月12日にロンドン大学キングスカレッジの Centre for Computing in the Humanities (CCH) を訪問し、また9月14日から17日までケンブリッジ大学で開催されたデジタル・ヒューマニティーズ (以下 DH) に関する国際会議 DRHA08 (Digital Resources for the Humanities and Arts 2008) に参加しました。

CCH は、40 名以上のスタッフと 30 以上の研究プロジェクトを擁する、イギリスにおける DH 研究を代表する拠点の一つです。各プロジェクトが関わる研究分野は、歴史学、文学、社会学、図書館学、情報科学など多岐にわたり、様々なバックグラウンドを持つ研究者による共同研究が活発に行われている様子が窺われました。

また、CCH の Simon Tanner 氏 (King's Digital Consultancy Services ディレクター) と Hugh Denard 講師 (King's Visualisation Lab アソシエイトディレクター) からは、CCH の概要とそれぞれの研究内容について直接話を伺いました。お二人の話から、CCH と本拠点における研究に非常に共通点が多いことがわかりました。また、本拠点について紹介したところ、お二人とも非常に興味を示してくれ、今後何らかの形で CCH と本拠点との連携が考えられるのではないかと印象を持ちました。

キングスカレッジ訪問の後に参加した国際会議 DRHA08 は、1996 年から毎年イギリスで開催されている DH 関連の国際会議です。今年は約 130 名の参加者と約 70 件の研究発表があり、多くの興味深い研究に触れることができました。会議名の最後に Arts とあることから想像される通り、芸術寄りの発表が多く見られ、一般的な口頭発表やパネルだけではなく、パフォーマンスやインスタレーションの形式による発表も見られました。また、Second Life のセッションが 2 つもあり、さらに Wikipedia、YouTube、SNS (Social Network Service)、ブログなどの Web2.0 的なユーザ参加型のツールを人文学や芸術の研究に活用するというアプローチの研究が多く見られたのが印象的でした。

会議全体の印象として、イギリスでも日本と同

様に、分野間の考え方のギャップはあるようですが、より積極的に異分野間の学際的な共同研究が行われているという印象を受けました。また、最近ではプロジェクトの研究結果が Web 上で公開されることが多くなっていますが、プロジェクト終了後にもそれらの研究成果へのアクセスを保证するための「持続性 (sustainability)」が大きな課題として議論されていました。この点は、本拠点においても今後考えていく必要がある重要な課題だと思われます。

(まえだ・あきら 図書館情報学)



CCH の外観



DRHA 会場の外観

イベント（主催・共催）の記録

- [シンポジウム]『源氏物語』の読み方 ―学際的視野から― 2008年10月11日 立命館大学・衣笠キャンパス・敬学館210
- [説明会]「道仙化学製陶所窯跡―第3次発掘調査―」現地説明会 2008年11月1日 京都市東山区・楽只苑敷地内
- [展覧会]「極め札展」2008年12月1日～12日 立命館大学アート・リサーチセンター
- [研究会]「洛中洛外図屏風の総合的アーカイブと都市風俗の変遷」プロジェクト研究会 2008年12月22・23日

GCOE セミナーの記録

会場：【衣笠】立命館大学アート・リサーチセンター 【BKC】立命館大学情報理工学部メディア情報学科会議室他
※所属未記載は本拠点研究メンバーです。

- 第30回 10月7日（火）
當山 日出夫「現代日本の人文情報学とデジタルアーカイブについて」
稲葉 光行「デジタル・ヒューマニティーズ研究のトレンド～Digital Humanities 2008 参加報告」
- 第31回 10月14日（火）
前田 亮「イギリスにおけるデジタル・ヒューマニティーズの研究動向 ―ロンドン大学キングスカレッジ訪問および DRHA08 参加報告―」
八村 広三郎「北米におけるデジタルヒューマニティーズの現状」
- 第32回 10月21日（火）
大野 晋「時系列情報の組み合わせに関する研究」
勝村 文子「日本国内におけるアートプロジェクトを通じた地域文化創造の可能性」
- 第33回 10月28日（火）
鶴田 清也「バーチャルダンスコラボレーションシステムのための音楽からの感性情報抽出に関する基礎研究」
尹 新「皮膚触覚提示可能な文化財展示システムの開発」
- 番外編（Vol.6）10月31日（金）
田畑 智司（大阪大学大学院言語文化研究科准教授）
「米国歴代大統領の就任演説にみる言語変異 ―多変量文体分析モデルによるテキストマイニング―」
- 第34回 11月4日（火）
明星 聖子（埼玉大学教養学部准教授）
「デジタル化以前に考えなければならないこと ―人文科学は何に基いて研究するのか―」
- 第35回 11月11日（火）
周 萍「中国における日本文化研究事情」
岡本 隆明「古文書・典籍を対象とする文字管理システムを使用した訓点の整理について」
- 第36回 11月18日（火）
桐村 喬「地図情報のカタログサイトの開発 ―空間検索・分析機能の実装―」
花田 卓司「南北朝期の京都合戦 ―軍事関係文書と軍記物語から―」
- 第37回 11月25日（火）
本多 健一「中世後期の京都今宮祭に関する基礎的考察」
金子 貴昭「版木資料のデジタル・アーカイブについて」
- 番外編（Vol.7）11月27日（木）
グレゴリ・アーヴィン（ヴィクトリア&アルバート美術館）
Japan at the Victoria & Albert Museum: acquiring and recording the collections
- 第38回 12月2日（火）
石上 阿希「在外艷本の調査 ―大英博物館及びボストン美術館―」
崔 雄「モーションキャプチャを用いた居合道の熟練度に関する定量化」
- 番外編（Vol.8）12月4日（木） 21:00～22:00 ※NYからインターネット中継
カグノ 太田 麻衣子（コロンビア大学東アジア図書館アーキビスト）
「バーバラ・カーティス・足立文案コレクション」のアーカイブ手法と今後の展開 ―コロンビア大学東アジア図書館でのアーカイブ事例―
- 第39回 12月9日（火）
齊藤 ちせ「日本文化・芸術研究における学術ポータルサイトの現状分析 ―Web で提供されている研究ツールとして―」
楠井 清文「植民地期「朝鮮」文学雑誌データベースの構築と課題」
- 第40回 12月16日（火）
John Carpenter「美術としてのカリグラフィー ―中世―」
- 番外編（Vol.9）12月18日（木）
高木 元（千葉大学文学部教授）
「壺中の天 ―デジタル環境下における国文学（研究手法）の孤独」

■第41回 12月23日(火)

上田 学「常設館出現期の京都における映画興行の様相」

斎藤 進也「地層モデリングによるナラティブ情報の可視化と解釈」

イベント、GCOE セミナーの最新情報は下記のサイトをご覧ください。

立命館大学・日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点 HP http://www.ritsumeijp/humanities/index_j.html

<http://www.arc.ritsumeijp/lib/GCOE/>

立命館大学アート・リサーチセンター HP <http://www.arc.ritsumeijp/>

GCOE セミナー・ブログ <http://www.arc.ritsumeijp/lib/GCOE/seminar/>

第1回日本文化デジタル・ヒューマニティーズ国際シンポジウム

The 1st International Symposium on Digital Humanities for Japanese Arts and Cultures (DH-JAC2009)

DH-JAC 2009

●日程: 2009. **2.27** fri & **28** sat

●会場: 立命館大学衣笠キャンパス・以学館2号ホール

●使用言語: 日本語・英語 ※同時通訳あり。

入場無料(要登録) 登録方法は下記 HP をご覧ください。

URL: <http://www.arc.ritsumeijp/lib/GCOE/info/dh-jac2009.html> (JAPANESE)

<http://www.arc.ritsumeijp/lib/GCOE/info/dh-jac2009-e.html> (ENGLISH)

主催: 文部科学省グローバルCOEプログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」(立命館大学)

●プログラム:

第1日

「デジタル・ヒューマニティーズとは何か? -現在と未来-」

2月27日
(金)

コーディネーター: 八村 広三郎 (立命館大学大学院理工学研究科教授) + 矢野 桂司 (立命館大学大学院文学研究科教授)

講師 [立命館大学大学院]: 川嶋 将生 (文学研究科教授) 八村 広三郎 (理工学研究科教授) 赤間亮 (文学研究科教授)

矢野 桂司 (文学研究科教授) 稲葉 光行 (政策科学研究科教授)

招待講師: 青柳 正規 (国立西洋美術館館長) イアン・グレゴリー (ランカスター大学上級講師)

イーロ・ハイホネン (ヘルシンキ工科大学教授) リチャード・ピーチャム (ロンドン大学キングス・カレッジ教授)

ニール・フライスタット (メリーランド大学教授)

第2日

午前 若手研究者海外派遣 (ITP) 成果報告会

2月28日
(土)

講師: 石上 阿希 (立命館大学衣笠総合研究機構 PD) 大槻 知史 (立命館大学衣笠総合研究機構 PD)

水田 哲生 (立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構 PD) 鶴田 清也 (立命館大学大学院理工学研究科 D3)

大矢 敦子 (立命館大学大学院文学研究科 D2) 大野 晋 (立命館大学大学院政策科学研究科 D1)

午後 「イメージDBと博物館ネットワークのイノベーション -日本文化芸術研究のグローバル化とネットワーク化-」

コーディネーター: 赤間 亮 (立命館大学大学院文学研究科教授)

招待講師: ヨーゼフ・クライナー (法政大学特任教授、ボン大学名誉教授) ヘレナ・ホンクーボヴァ (ブラハ・ナショナルギャラリー)

ロジーナ・バックランド (大英博物館) セーラ・トンプソン+エイブラハム・シュレーダー (ボストン美術館)

文部科学省グローバル COE プログラム

「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」(立命館大学)

News Letter 第5号

2009年1月10日発行

立命館大学アート・リサーチセンター
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
TEL:075-466-3411
FAX:075-466-3415
<http://www.arc.ritsumeijp/>

お問い合わせ

立命館大学研究部人文社会リサーチオフィス アート・リサーチセンター事務局
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

TEL:075-465-8476 (月~金 9:00 ~ 17:30)

FAX:075-465-8342

E-mail: jdh-jimu@st.ritsumeijp

